

# 追試をするということの価値（Ⅲ）

——国語科「うとてとこ」（詩）の授業に即して——

岡 利 道

本稿は、岡（2020）・岡（2021）を受け、当初から掲げた目的どおり、原実践である野口芳宏氏が1985年7月17日に千葉県木更津市立西清小学校4年1組で行った「うとてとこ」の授業を追試することの価値を明らかにしていこうとするものである。

ただ、岡（2020）でも触れたように、「はじめに教材文の全文を児童に示し、その後で題名「うとてとこ」の謎解きを試してみることは可能であろう。」との仮説を持ち、対案を提出することが、本稿の趣旨である。以下、①先行実践（原実践）、②追試実践（案）、③本時の目標、④授業意図、⑤本時の展開（案）の順に述べることとする。

## 【先行実践（原実践）】

指導者：野口芳宏先生 学級：千葉県木更津市立西清小学校4年1組  
日時：1985年7月17日（金） 何校時かは不明

## 【追試実践（案）】

指導者：岡 利道（4年の学級を想定） 日時： —

## 【本時の目標】（原実践のまま、一部改）

- 1 ことばのおもしろさ、楽しさに気づき、朗読を楽しむことができる。
- 2 上手に朗読ができる。
- 3 ことばのひびき、リズム、意味などの美しさを味わい、ことばに対する感覚を育てる。

※ これらのことを包みこんだ形として、次のような学習のめあてとする。

詩をたの詩もう、詩に詩た詩もう  
（詩を楽しもう、詩に親しもう）

【授業意図】（原実践のまま）

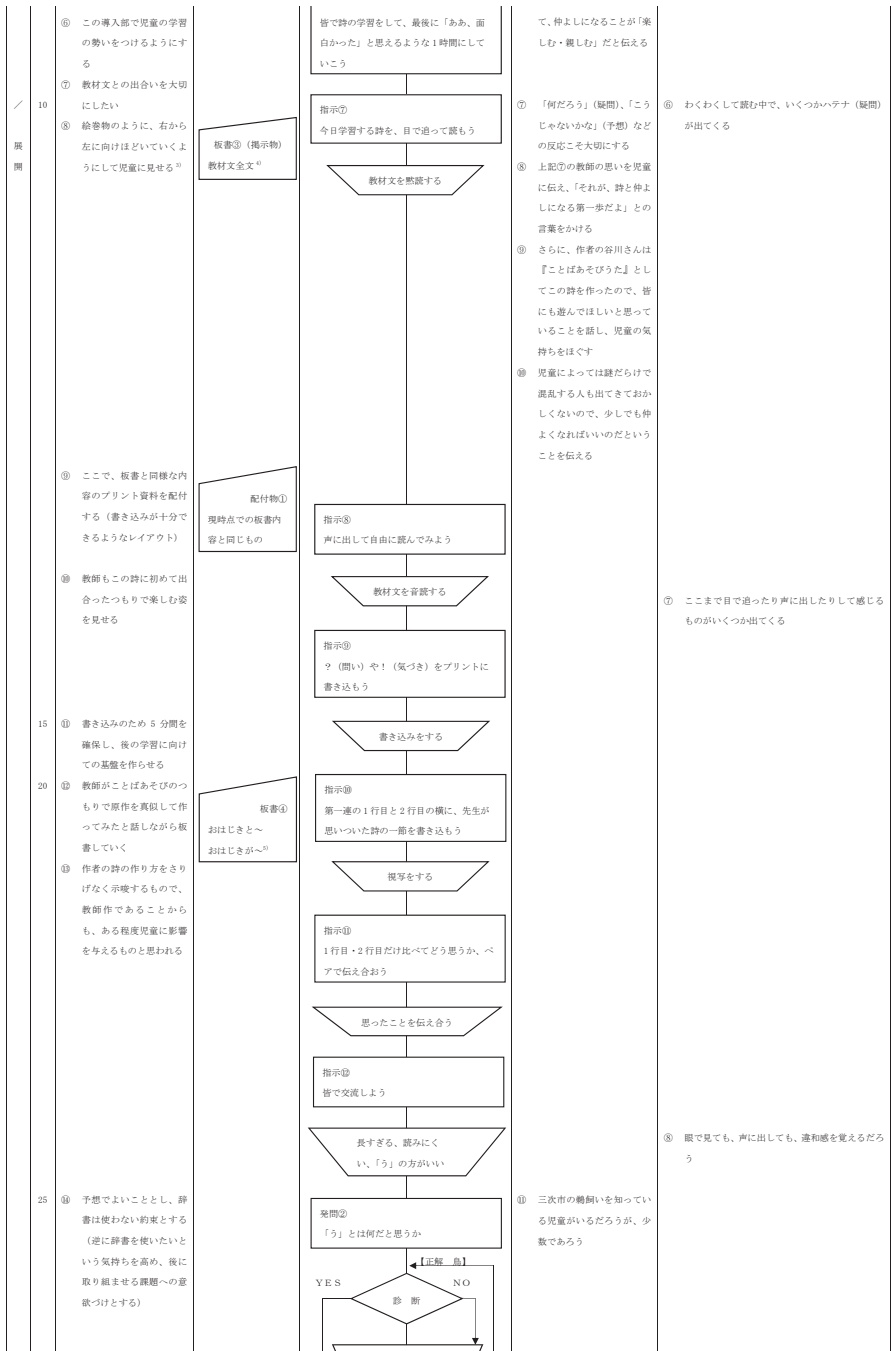
朗読を上手にするためには、本文の意図、意味を的確に理解し、そこに漂っている情趣をとらえることが前提となる。それらにふさわしく緩急、強弱、遅速、大小、軽重をうまく表現していくことが大切である。そのような授業にしたい。

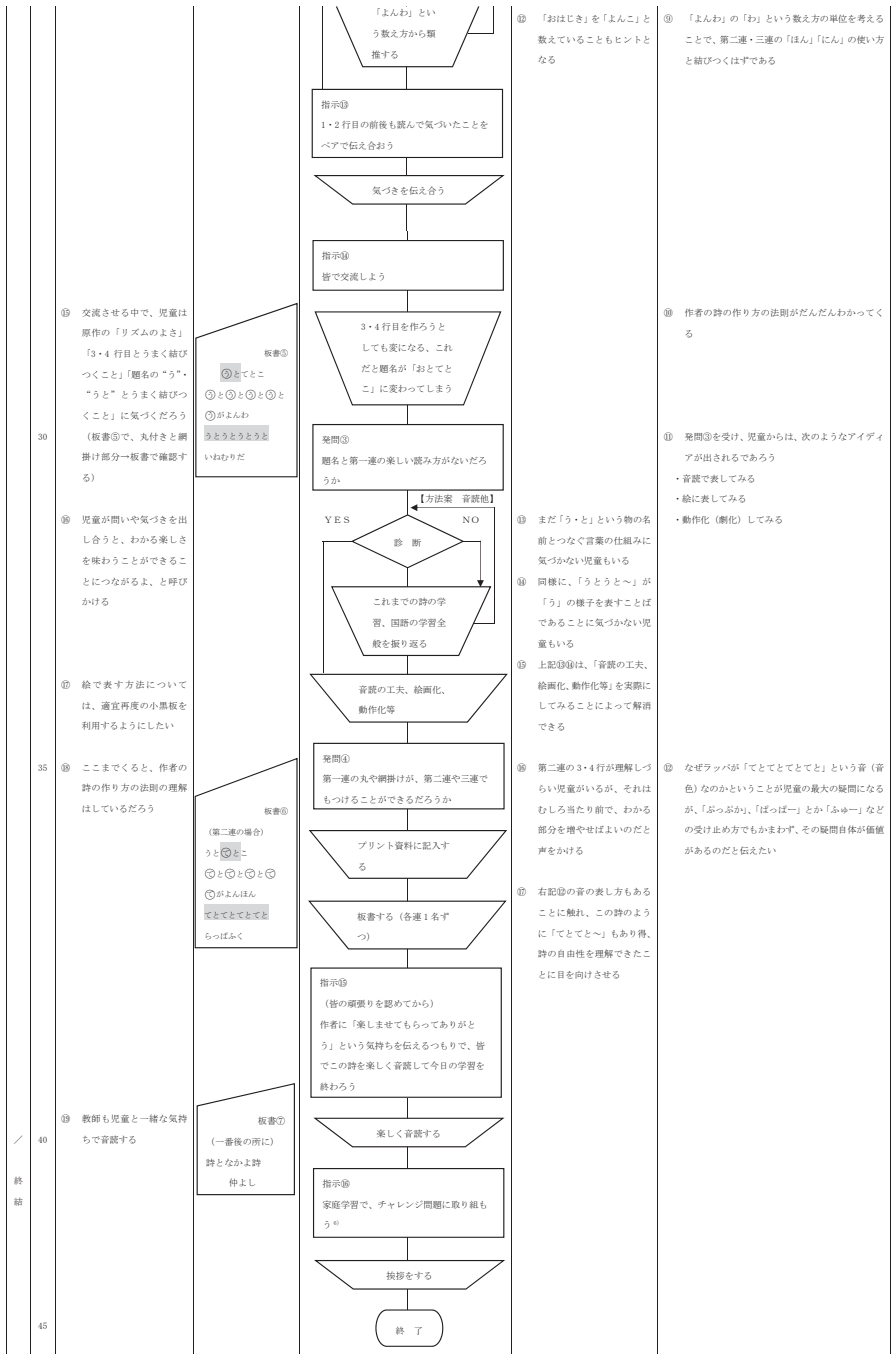
【本時の展開（案）】

以下は、筆者が原実践の授業記録を基に、教授＝学習過程システム設計の考えに従って表にまとめたものである。

表3<sup>1)</sup> 追試実践研究のための学習指導案・本時展開案

時間	教授活動の分析		目標の分析	学習活動の分析	
	教師の行動分析	教授資料提示	フローチャート	不適応行動と対策	児童の行動分析
0 導入				① 全員の顔を見直し、反応を確かめる  ② 詩というものへの抵抗感があっても何ら不思議ではないことを伝える	
	① 詩やその学習に抵抗感を持つ児童に対しても否定的に見ることをしない ② 詩は面白いものなんだと自然に感じるような学習にしたい	板書① めあて 詩をたの詩もう 詩に詩た詩もう	指示② 皆の詩の学習が一步前進するよう本時の学習をしよう  指示③ 今日の学習のめあてを皆で読もう  めあてを音読する	③ 変わった表現で戸惑うかもしれないが、各自が思い思いに口に出せばよい	① さよとんとして、どんな詩だったか思い出せない児童が2～3割はいる
	③ 児童が感じた正直な思いを言葉にしてほしい		指示④ 学習のめあてを読んで「何かあだな」と思ったことをペアで話してみよう  自分なりの思いを ペアで伝え合う		② これはあだなと詩しがる児童もいれば、駄洒落だと滑稽に思う児童もいるだろう
	④ 笑みがこぼれ、和やかな雰囲気になることを願う	板書② めあてのそれぞれの横に書き足す 笑しもう 観しもう	発問① このめあてで学習できそうですか  診断 YES → 指示⑤ これまでの詩の学習でしたこと を思い出してみよう  1～3年生での詩の学習経験を語り合う  指示⑥	④ そんなことできるのかな、不安だなという思いこそ学習の推進力にいく	③ 「詩」の字がたくさん使われている、駄洒落だよ、詩の学習をするんだ等反応
5	⑤ 気軽に疑問や気づきを出し合えばよいのと思っほしい			⑤ 思い出しにくい児童のために、習った作品名等を教師がそれとなく伝え、ヒントとする <sup>2)</sup> ⑥ 右記⑤のような児童には、詩を友だちと同じだと思	④ 左記①の中身としては、③教師の説明が多くて途中でわからなくなり、結局何を学習したのか覚束なくなつたなどの思い、⑧少しヒントをもらおうと案外覚えていることもあること、⑨特に音読の力など自己評価が早く自分ではあまりできていないと考えているにすぎないこと、等があるはずである
				⑤ 思い出しにくい児童のために、習った作品名等を教師がそれとなく伝え、ヒントとする <sup>2)</sup> ⑥ 右記⑤のような児童には、詩を友だちと同じだと思	⑤ 詩を楽しむ・詩に親しむと言っても、伝わりづらい児童もいる





〔注〕

1) 岡 (2020) で表 1 を、岡 (2021) で表 2 をそれぞれ示したことから、本稿ではその続きとして表 3 としている。

2) 光村図書出版の最新版小学校国語教科書によれば (甲斐ら (2020))、第 1 学年から第 3 学年では、児童は次のような詩の学習を経験していることになる。

1 年時。言葉遊びによって短詩形の作品に触れる。音読をしてみる。普通の文章の書き方とは違うことを知る。1 行の変わり目の自由度も高いと思うだろう。「のはらうた」(工藤直子) のように、話し手が動物であるものにも触れる。句読点をつけないスタイルのものに出会うことから始まる。「こくご一下ともだち」以降はいわゆる「扉の詩」が必ずあり、区切り目における「学習びらき」においてその詩に出合うようになる。

2 年時。「みんな」は谷川俊太郎の作で、オノマトペや話し言葉が多用された作品である。「雨のうた」(鶴見正夫) は、繰り返しの表現が多く、脚韻を踏むことも取り入れている。「はんたいことば」(原田直友) のように、いわゆるユーモア詩にも接する。「こくご二下赤とんぼ」になると、初めて詩という用語が出てくる。その単元名は「詩の楽しみ方を見つけよう」で、文字どおり楽しむ学習をしている。言葉遊びの内では、「わるいにわとりとわにいるわ」(石津ちひろ) の如く、上から読んでも下から読んでも同じという回文にも出合っている。

3 年時。谷川俊太郎の「どきん」を習う。単元名を見ると、やはり「詩を楽しもう」である。児童は、その詩に溢れるユーモアに気づくのではなからうか。「わたしと小鳥とすずと」(金子みすゞ) では、句読点を使う場合もあるのだということ、古い言い回しの表現も目にし、否定形「～ない」の多用などを知る。「夕日がせなかをおしてくる」(阪田寛夫) を音読して声の力に気づき、一つの詩において話し手が変わって字下げによって書き分けていることにも接する。「国語三下あおぞら」になると、単元「詩の楽しみ方を見つけよう一詩のくふうを楽しもう」があり、この「うとてとこ」の学習に繋がるうってつけのものが含まれている。折句(アクロスティブ) や、見る詩(音声化して耳に(聴覚に) 訴えるのではない、視覚に訴える詩) の楽しさ、さらに児童も真似て作る楽しさを味わうことができる単元である。

3) 岡 (2020) でも触れたが、「この原実践は、もはや三十年近くも昔のことだが、かなり広く「追試」されたものであり、(中略) この実践の原理、本質は「先を見せないうで、徐々に次の部分を見せていく」という「絵巻物方式」にある。原理追試こそが本物の追試なのである。」(野口2011) とあることから、ここにおいても「絵巻物方式」自体は取り入れるようにした。

4) 以下のように、題名・作者名・詩本文を、掲示物(模造紙に書いたもの)形式で、ロール状にしておいたものを左から右にかけてゆっくりとほどいていくようにして見せる。この時点での板書図は以下ようになる。

○月○日○曜日

楽しもう

親しもう

めあて 詩をたの詩もう、詩に詩た詩もう

うとてとこ

うとうとうとう

うがよんわ

うとうとうとうと

いねむりだ

てとてとてとて

てがよんほん

てとてとてとてと

らっぱあく

ことことことこと

こがよんにん

ことことことこと

とをたたく

(谷川俊太郎『ことばあそびうた』より)

- 5) 書き込み(斜体・太字部分)を加えると、板書は次のようになる。なお、該当部分のみである。

うとてとこ

谷川俊太郎

うとうとうとう

おはじきとおはじきとおはじきとおはじきとおはじき

うがよんわ

おはじきがよんこ

うとうとうとうと

いねむりだ

- 6) チャレンジ問題は、発展学習として「もしもこの詩が漢字やカタカナも使ってよいことになったら、あなたはどのように書くか」に取り組みさせるものである。翌日の国語の時間の冒頭部分で答え合わせをしよう、と呼びかけておく。その解答例は次のとおり。

チャレンジ問題

※漢字やカタカナをあてはめると  
どうなるか、下に書いてみよう。

うとてとこ

うとうとうとう

うがよんわ

うとうとうとうと

いねむりだ

てとてとてとて

てがよんほん

てとてとてとてと

らっばふく

ことことことこ

こがよん

ことことことこと

とをたたく

【解答例】

※例えば左のようになります。

鵜と手と子

鵜と鵜と鵜と鵜

鵜が四羽

うとうとうとうと

居眠りだ

手と手と手と手

手が四本

テトテトテトテト

喇叭吹く (☆ラッパでもよい)

子と子と子と子

子が四人

コトコトコトコト

戸を叩く

〔参考文献〕

甲斐陸朗他（編）. 2020. こくご一上かざぐるま他. 光村図書出版.

野口芳宏. 2011. 提言 なぜ「追試」が必要か 単純追試から原理追試へ—批判的摂取こそが本物—. 授業研究21.8月号 No. 659. p. 13. 明治図書出版.

岡 利道. 2020. 追試をするということの価値 (I)—国語科「うとてとこ」(詩)の授業に即して—. 文教國文學第64号. pp. (1)-(14).

岡 利道. 2021. 追試をするということの価値 (II)—国語科「うとてとこ」(詩)の授業に即して—. 文教國文學第65号. pp. (1)-(9).

(本学教授)